

ベ ス ト ピ ア
Bestopia

「パリ通信 29号」

ベストピアは小原靖夫の個人誌です。

平成二十六年五月
第二十九号

< 2014年 5月 >

古賀 順子

シャルトル大聖堂

5月に入り、パリはなかなか天気が安定しません。晴れ間があっても、突然どしゃ降りになったり、日中の気温も15-16℃止まりです。一日晴れる日を待って、シャルトル大聖堂のステンドグラスを見に行きました。

パリ・モンパルナス駅から列車で一時間（パリから80km）、シャルトル駅から歩いて10分で大聖堂まで行けます。駅に近づく頃から、ともにゴシック様式ですが、左右の形が異なる鐘楼が見え始めます。装飾的なフランボワイヤン様式の北鐘楼が112m、シンプルな南の鐘楼103m、全長130mの大きな聖堂です。5世紀にはすでに巡礼の地として知られていたシャルトルですが、現在の聖堂は、1194年の火災後、ロマネスク様式だった旧聖堂の上に再建されました。30年ほどで大部分が再建されたことから分かるように、信仰の篤かった時代です。聖人の遺物はなく、876年、シャルルマーニュの孫シャルル2世(禿頭王)が、聖母マリアが受胎告知を受けたときに身につけていたと言われる「聖なるヴェール」を寄進し、マリア信仰の地としてヨーロッパ中に知られるようになります。

4人の福音者(聖ヨハネ、聖マルコ、聖ルカ、聖マタイ)を戴く西の正門、救世主キリスト像がある南の大扉、聖母マリアの母聖アンナが見護る北の大扉など、彫刻や装飾の数々は、ゴシック建築の中でも比類のない美しさです。聖堂内に入ると、繊細で緻密なステンドグラスの青、黄色、赤の美しい輝きに目を奪われます。西門の薔薇窓「最後の審判」の下には、「エッサイの木」「受肉」「受難と復活」が描かれています。すべて13世紀に作られたステンドグラスです。赤い衣に冠を付け、横になったエッサイ(古代イスラエル王ダビデの父)からキリストの木(家系図)が美しいブルーを背景に延びて

います。旧約聖書から新約聖書までの様々な物語が、聖堂内のステンドグラス全体に見事に繰り広げられています。ステンドグラスは、下から上へ、左から右へと読んでいきます。グーテンベルグが活版印刷術を発明し、「42行旧約聖書」を世に送り出すのは、1450年代です。13-14世紀の人々が聖書を文字の形で読むことはなく、宝石のように美しいステンドグラスを通して、敬虔な思いで聖書の教えを学んでいたに違いありません。13世紀のステンドグラスがこれだけ沢山、これだけ美しく現在まで残っているところは他にありません。今日でも、見る人の感動は失われていません。

この美しい大聖堂の北の薔薇窓を寄進したのが、聖ルイ王(ルイ9世)の母ブランシュ・ド・カスティーユ(1188-1252)です。フランス王ルイ7世とイギリス王ヘンリー2世の2人の王に嫁いだアリエノール・ダキテーヌの孫娘で、イギリスとフランスの和平を担い、12歳でルイ8世に嫁ぎます。1226年ルイ8世が亡くなると、息子聖ルイ王とともにフランスを治めます。パリのサント・シャペルも、聖ルイ王とブランシュ・ド・カスティーユが建立しています。パリやシャルトルがキリスト教の重要な聖地になったのは、この2人の統治下でした。中央に聖母マリアを配した北の薔薇窓(同じく13世紀)の下には、寄進した2人の紋「百合の花」と「城」が交互に並べられています。

1194年の火災に、地下礼拝堂で難を逃れた「聖なるヴェール」は、フランス革命時に切り刻まれて売却されました。その地下礼拝堂は長さ230m、フランス最大で、現在でもミサが行なわれています。主祭壇に祀られた彫刻「聖母の被昇天」からも分かるように、シャルトルはフランス一の聖母信仰の地です。パリから僅か1時間、ユール川に沿って残る街並には、中世の面影があります。13-14世紀の人たちにとって、巡礼の地シャルトルがとても重要な場所であったことが想像できます。

シャルトル大聖堂

